

第2の改宗 : グレアム・グリーンの『地図のない旅』考察

著者	玉井 久之
雑誌名	研究論集
巻	80
ページ	13-26
発行年	2004-08
URL	http://doi.org/10.18956/00006292

第2の改宗：

グレアム・グリーン『地図のない旅』考察¹⁾

玉井久之

I

グレアム・グリーンは1926年2月、22歳の時にイギリス国教会からカトリックに改宗したが、この改宗は彼の内面的欲求が高じた上での積極的なものとは言えない。グリーンは、自伝『ある種の人生』の中で、改宗の直接の理由として、婚約者のヴィヴィアンがカトリック教徒であり「もしカトリック教徒と結婚するならば、少なくとも彼女が抱いている信仰の性質と限界を知るべきである」²⁾と考えたことと、「時間つぶしになるだろう」³⁾と考えたと書いている。しかしグリーンにより語られる改宗の理由ははっきりしない。ジェリーによると、グリーンは改宗の最大の理由はヴィヴィアンと結婚するためであったらしい。ジェリーは、グリーンはオックスフォード在学中には「神の存在を信じることへの無神論者的な軽蔑心」⁴⁾を抱いていたにも関わらず、ヴィヴィアンが当初グリーンへの求婚を拒否した理由は宗教上の理由であり、「うら若き無神論者がうら若き改宗者と恋に落ち、カトリック的信仰の象徴の理解が始まろうとしていた」⁵⁾と述べている。

グリーンは1925年の11月初旬からトロロープ神父により公教要理を受け初め、翌年の2月に洗礼を受けることになるのだが、改宗当時のグリーンは発言を集めてみると、「カトリックへの知的理解」、そして「信じることへの恐れ」という特徴が浮かび上がってくる。グリーンは「1926年1月、私は、われわれが神と呼ぶものがたぶん存在するのであるという確信を持った」⁶⁾と書く一方で、「私はカトリックの教義に、情緒的とはいえないまでも知的な信仰 (“an intellectual if not an emotional belief”) を持つカトリック教徒である」⁷⁾、さらに「私はある宗教的信仰 (“a religious faith”) に改宗したことはない。私はその教義の蓋然性における独自の議論に納得しただけだった」(251)と書いている。グリーンはここで「信仰」という言葉に対し“belief”(「ビリーフ」)と“faith”(「フェイス」)という使い分けをしている。晩年の、マ

リ＝フランソワーズ・アランとのインタビューで明らかになるように、グリーンにとって「ビリーフ」は教義の知識、あるいは教義に対する知的理解で理性に基づくものである一方で、「フェイス」とは神の恩寵を素直に信じる素朴な信仰のことで、「フェイス」は「ビリーフ」より優れた信仰形態である⁸⁾。「ビリーフ」と「フェイス」の関係から考えてみると、グリーンがこの当時の信仰は「ビリーフ」であって「フェイス」ではなかったということになる。続いてグリーンは「私は初めは自分の将来の結婚のために行動を起こしたが、今、陸地は私の足元で崩れて、潮が私をどこへ運んでいくかと、私は恐れた」⁹⁾と書き、次のように書いている。

もし私が至高の、全能で全知の力のほのかな可能性を信じることができたなら、その後は不可能なものは何一つないように思えることを悟った。私が闘い闘ったのは独断的な無神論の立場に立ってのことであった。それはまるで個人的な生存のための闘いのようにであった。¹⁰⁾

つまりこのころのグリーンには、公教要理を通してカトリックに対する知的な関心を抱きながらも、それを信じることにより自分を失ってしまうのではないかという「恐れ」とカトリックに対する「警戒心」があるのである。グリーンが自分の改宗の知的側面を強調するのも、それはこの「恐れ」と「警戒心」の表れである。洗礼名もトマス・アクィナスではなく「疑う人」聖トマスにあやかってトマスの名を受け、洗礼を受けた後も、グリーンは「喜びはまったくなく、さめた憂鬱だけがあった」¹¹⁾と言うようにたいした感慨を抱いていないが、この「恐れ」と「警戒心」のためであろう。言い換えると、改宗時のグリーンは、神の存在は認めるけれども、気持ちが神に向かわない状態にあったことになる。

さて1926年にカトリックへ改宗した後、グリーンは実に12年間も自分の宗教観を本格的に作品化することができなかった。カトリックの教義を取り扱ったとされる『ブライトン・ロック』が書かれたのは1938年である。これは先に書いたグリーン「カトリックに対する知的理解」、つまり「ビリーフ」としての信仰と、信じることへの抵抗感のためであろう。そのグリーンに大きな転機を与えたのは1935年の命がけのリベリア旅行であり、グリーンは1935年1月にリベプールを出発し、リベリアで最も暑い2月と3月にかけての4週間をかけて350マイルを踏破し、4月に帰国した。その旅行記が1936年に出版された『地図のない旅』である。本稿では、このリベリア旅行はグリーンにどのような影響を与えたのか、そしてグリーン「カトリック受容と、信じてしまうことへの抵抗感にどのような影響を与えたのかを検証し、リベリア旅行がグリーンにとっていわば「第2の改宗」のきっかけを与えた可能性について論じたい。

II

『地図のない旅』というタイトルは、表面的な意味で、共和国並びにキリスト教国として歴史が浅くこれまでまともな地図が作られたことがないリベリアへの旅を意味すると同時に、より深い意味で、グリーン自身の内面への旅を、さらには人類の歴史をたどる旅を意味する。事実グリーンはその旅行を「全くの沈黙の、そして隔離の3ヶ月という内面の冒険」¹²⁾と呼び、「アフリカの形はおおざっぱに言って人間の心臓の形に似ている」(30)と語っている。そしてこの「内面の冒険」の目的についてグリーンは次のように書いている。

今日われわれの世界は特に獣性に敏感であるようである。…しかし幾世紀にもわたる頭脳活動がわれわれをどの程度まで不幸に、そして絶滅の危機に押しやったかを思う時、できることならわれわれがどこからやって来て、どこで道を踏み外したのかを見てみたいという好奇心を時として抱くことがある。(9)

グリーンは「今日われわれの世界は特に獣性に敏感であるようである」と書いているが、これはグリーンがリベリアを旅行した1935年当時、ヨーロッパは第1次世界大戦を経て第2次世界大戦へと、より大きなカタストロフィーに向かっていた不安な時代精神を反映している。ちなみにヒトラーが政権を取ったのは、グリーンがリベリア旅行をする2年前の1933年のことである。そしてそのような未来に対する不安感、さらには「現在のわれわれに基づいた将来に対する不信」(8)を生み出したのも、「頭脳活動」が象徴するヨーロッパの合理主義と知性偏重の歴史に他ならないのである。ヨーロッパ文明の危機に直面したグリーンにとって、リベリア旅行は「われわれがどこからやって来て、どこで道を踏み外したのか」を探るという個人の問題を超え、「現在だけでなく、人が出で来た過去についての知識に基づいた、時間における自己の位置」(7)を確認するという普遍的な問題に発展する。今までヨーロッパを離れたことがなかったグリーンは、ヨーロッパ文明を離れた原始の世界に身を置き、人類と自分の出発点を見ることにより自らの歴史的立場を探そうとしたのである。言い換えれば、その探求は未来に対して何らかの希望を探そうという試みであると言えよう。

グリーンは1935年が明けるとすぐに従妹のバーバラを伴ってリベリアに向けて出発し、1月の末にシエラレオーネに到着した。その後シエラレオーネの首都フリータウンから列車で2日ばかりでペンデンブーまで行き、そこから自動車と徒歩でリベリア領地に入っている。リベリア奥地の状況については、グリーンはイギリス政府刊行の『ブルーブック』を通してある程度は把握している。ペスト、黄熱病、象皮病、ハンセン病、インド痘、マラリアなどの病気が蔓延しているにもかかわらず医師が少ないこと、そして共和国という名にも関わらず、政府軍関

係者による現地人の虐殺が行われている事実などである。しかしグリーンはこの『ブルーブック』に書かれたリベリアの状況に、嫌悪感よりも魅力を感じている。グリーンは次のように書いている。

これもまたわたしを魅了した。この地には他では見当たらないほどのみずぼらしさがあるように思えた。そしてみずぼらしさというものはとても深い魅力を持っている。文明のみずぼらしさですら、レスター・スクウェアの屋上の看板ですら、ボンド・ストリートの娼婦ですら、トテナム・コート・ロードの料理中の野菜の匂いですら、グレート・ポートランド・ストリートの自動車のセールスマンですら、魅力を持っている。それは一時的にせよ失われたものに対する郷愁感を満足させてくれるようだ。それは一つ前の段階を表しているようだ。(7)

グリーンはここで、共和国としてあるいはキリスト教国として歴史が浅いリベリアの「みずぼらしさ」と、文明に必然的に存在するイギリスの「みずぼらしさ」を対比させている。グリーンはかつて「みずぼらしさは（文明の）初めに、あるいは終わりにより近い」¹⁹⁾と発言したことがあるが、グリーンにとって、リベリアの「みずぼらしさ」とイギリスの「みずぼらしさ」の違いは、前者が文明の初めに近く、後者が終わりに近いのである。それゆえグリーンにとっては、リベリアの「みずぼらしさ」は文明の「一つ前の段階」を表し、「失われたものに対する郷愁感」を満足させるものとなっている。イギリスの場合と違って、リベリアはまだ文明に毒されることなく、原始の姿をより純粋な形で残しているのである。その点が、グリーンがヨーロッパ文明を見直そうとした時にリベリアを選んだ理由になっている。

グリーンがリベリア旅行を始めてすぐに喪失して行き、役に立たないと考えたのは美の基準と時間の感覚というヨーロッパ的な基準・尺度である。たとえばグリーンはシエラレオネのフリータウンからベンデンブーに向かう列車の中で、アフリカ女性について次のように考えている。

私はまだ裸体を見ることに飽いてはいなかった（後に私は自分が何年もの間牛ばかりと暮らしてきたように思い始めた）。あるいはまたこれらの女性はリベリアで見たほとんどの女性よりも美しく、体つきがきれいだった。人からどれだけ早く西欧の基準が抜け落ちていくかは興味深いことである。平たいブロンズの隆起をなして垂れているこれらの長い乳房は、ヨーロッパ女性の小さく丸い未熟な胸よりももっと美しく見えた。(51)

グリーンはヨーロッパ的な美的基準の喪失は、彼のアフリカへの同化を示すものとなっている

が、一方でグリーンが最後まで捨て切れなかったのは時間の観念である。グリーンはアフリカにおける時間の感覚のなさに参ってしまい、時間通りに行程が進まず、時計が役に立たない状況にいらだちを感じる。事実当初グリーンはこの旅を2週間で終えるはずであったが、実際は4週間かかっている。しかしその時間の感覚のなさにもやがて慣れてしまい、グリーンは次のように書いている。

私は後にまったく気にしなくなった。そしてただただ歩き、十分歩いたところで、名前も知らないある村に泊まった。そして自分自身をアフリカの流れに身をまかせるようになった。(67)

このように時間を気にせず、アフリカに身をまかせて初めて見えてきたものが、リベリア奥地の住人における、自分とヨーロッパ人が失った子供時代の「無垢さ」である。

III

グリーンにとって一番大きな驚きは、アフリカは決して未知の国ではなく、グリーン個人と現代のイギリス人と共通するものがある、つながりがあるという発見である。グリーンは、ボラフォンという村で仮面をかぶった「森の悪魔」と呼ばれる村人の踊りを見た時の印象を次のように書いている。

私は4歳の時に見た「青葉のジャック」を思い出した。それは顔以外をすっかり葉っぱで覆い、一種の葉っぱの潜水服を着て、村から遠く離れた田舎の十字路でぐるぐる回り、彼を眺めるのは数名の観客や自転車旅行者しかいなかった。それは9世紀のころイギリスでは宗教的な意味を持ち、その踊りは冬の死と春の再来を祝う儀式の一部だった。そしてここリベリアで繰り返し私はわれわれが何から発展してきたのか、その暗示を見つけたのである。この仮面を付けた踊りはわれわれには縁遠いものではなく、(イギリスでも人間が動物の格好をして踊った時代があった)、それは墓の上の十字架と異教の象徴がわれわれに縁遠くないのと同じことある。私は故郷に帰ったような感動を覚えた。というのもここで個人的そして民族的にも子供時代を連想させるものを見出していたからであり、私も同じような年老いた魔女を恐れていたのであった。(99)

グリーンが4歳のころに見た「青葉のジャック」についてさらに説明すると、『イギリス祭事・民俗辞典』によれば、「青葉のジャック」とは、特に煙突掃除夫たちにより行われた、青葉や

小枝で囲まれたピラミッド形の屋台の中に仲間の1人を入れ、中で踊りを躍らせる五月祭の遊戯のことである。これはグリーン自身が述べているように、夏の到来を盛大に祝う祭りであり、本来ケルト人によって始められたまったく異教徒の祭儀である¹⁴⁾。グリーンはここでイギリスが経てきた異教からキリスト教へという歴史の流れと同じような流れをリベリアに見ているのである。つまり「森の悪魔」というキリスト教の神学とは無縁の「善でもなく悪でもない単なる力である、この超自然的世界」(202)からキリスト教の世界への移行をである。さらにリベリアがグリーンにとって身近な国であるという意識は、「森の悪魔」の踊りが、グリーンが少年時代に恐れていた「年老いた魔女」を思い出すことによりより強められている。グリーンはこの「年老いた魔女」に関して「われわれの子供時代に付きまとった魔女は善でも悪でもなかった。彼女たちは力でもってわれわれを怖がらせた」(202)と書いている。グリーンは、彼が子供時代に経験した「年老いた魔女」に対するのと同じような恐怖をリベリア奥地の住民が経験していると考えているのである。このようにして、リベリアはグリーンの内面において、集団的にも個人的にも「故郷」「子供時代」として認識されることになるのである。

このようにリベリアを自分自身とヨーロッパ人にとっての「故郷」「子供時代」と見なし、リベリア奥地の村人が保持している「無垢さ」に目を向ける時、グリーンは「無垢さ」の持つ素直な側面と残忍な側面という二面性を目撃することになる。「無垢さ」の持つ肯定的な特徴に注目した場合、グリーンの目には彼らの方が現代のイギリス人よりも、さまざまな点で優れているように映っている。グリーンの目に映った白人とリベリア奥地の住民の姿を比較してみよう。作品の中で幾度か言及される本国のイギリス人はみなグロテスクである。たとえばイートン校出身の老人は子供を鞭打つことで性的快楽を得ている。またグランド少佐は売春宿で、あたかも肉屋で肉を注文するように女性を注文する。またミス・キルヴェインは、女性預言者のジョアンナ・サウスコットの信者で、彼女の幽霊から彼女の生涯を聞いて本を書いたという奇妙な女性だ。またグリーンの批判的な目は、シエラレオーネのフリータウンにおける白人にも向けられている。フリータウンには一旗上げるために集まった白人がいてイギリス的生活条件を再現しているが、グリーンは「フリータウンにおける醜いものはすべてヨーロッパ製である。店も教会も役所も2軒のホテルも。もし美しいものがあるとすればそれはもともとあったものだ」(32)と言い切っている。そして西洋文明がフリータウンに与えた影響についても懐疑的で、「ここでは文明は搾取の域を出ない。それは住民の生活をほとんど向上させていないように思えた」(61)、「経済はほとんど黒人を犠牲にして成り立っていた」(39)と書いている。一方リベリア奥地で出会った住民に関しては、グリーンは彼らを「高貴な野蛮人」(61)と一種の撞着語法を用いて呼び、彼らの素直さと残酷さを描いている。まず村人の評価すべき点として、グリーンは、彼らのヨーロッパでは見かけられないような「誠実さ」「やさしさ」「正直さ」を挙げている。グリーンの目に映ったのは子供に優しく、隣人同士優しい住民の姿であり、

グリーンは「彼らは激しい言葉や突然の喧嘩に示されるヨーロッパの貧民のいらだった神経を決して見せなかった」(83)、「愛はヨーロッパで吟遊詩人により発明されたと言われているが、しかし愛はここでは文明の欺瞞なしに存在していた」(83)と書いている。このように、リベリアにおいては文明化された白人よりもリベリア奥地の村人の方が「誠実さ」「やさしさ」「正直さ」を保持しているという発見は、大人が成長の過程で失ってしまった「無垢さ」を見て驚き、感動するのに似ている。ガストンはこの点に関して次のように述べている。

創造的な想像力のために超自然的な恐怖を経験できるということ、そして彼らを取り巻く神秘に身をゆだねられるということは、リベリア住民の人生に対する見方がそれほどゆがめられていないことと、より自発的に、より激しく生きられるということである。つまり彼らはグリーンが子供時代に記憶しているのと同じように人生を見ているのである。¹⁵⁾

彼らは文明に毒されていないから、子供の場合は大人世界に汚されていないから、彼らの人生に対する見方がそれほどゆがめられていなくて、より自発的に、より激しく生きられるのである。しかし同時にその「無垢さ」には驚くほどの残忍さが含まれている。事実グリーンはリベリアの雰囲気の影響を受けたためであろうか、彼が14歳の時に近所に住む少女をいじめようとして感じた「残虐の楽しさ」(30)を旅の初めですでに思い出している。またアフリカの西海岸ではリベリアほど「豹結社」(199)や「ワニ結社」(199)などの「秘密結社」(199)と呼ばれる組織がしっかりと根を下ろしている国はないと言い、人間の犠牲を求めているという話を聞いて恐怖を覚えている。そしてグリーンは、「今では秘密結社が干渉から免れているリベリアにおいてのみ、幼児殺しや失踪事件が頻繁に起きている」(200)と書き、「この秘密結社の世界は陰惨な世界だ」(199)と結論付けている。グリーンはリベリアで、良しきにつけ悪しきにつけ子供時代の汚れていない「無垢さ」を追体験したことになる。

IV

さてリベリア旅行の意義についてグリーンが「しかし幾世紀にもわたる頭脳活動がわれわれをどの程度まで不幸に、そして絶滅の危機に押しやったかを思う時、できることならわれわれがどこからやって来て、どこで道を踏み外したのかを見てみたいという好奇心を時として抱くことがある」(9)と書いていたことは先に述べた。グリーンは今やグリーン個人と民族集団としての子供時代を追体験したわけだが、それはわれわれがどこで道を踏み外し現代に至っているかを示すヒントをグリーンに与え、結果としてグリーンの知的なカトリック受容に影響を及ぼしたと考えられる。まず現代ヨーロッパの迷妄の原因としてグリーンの内側ではっきりとし

た形で認識されたのは、現代のヨーロッパ人が「幾世紀にもわたる頭脳活動」という表現が表す思考・理性を重んじてきて、リベリアの村人が保持しているような感情・感性を喪失してしまったということである。さらにアーディナスト-ヴァルカンの表現を借りれば、「幾世紀にもわたる頭脳活動」とは「自然と本能、宗教的神話に対する原始的な知覚からヨーロッパ文明を遠ざけたもの」¹⁶⁾である。たとえば「味覚もより新鮮で、快感もより鋭く、恐怖感もより深く、より純粋である」(265) リベリアの村人は自然との一体感もより深い。リベリアの住民が、満月の夜に広場で歓喜して踊る場面を目撃した時の感想をグリーンは次のように述べている。

私はただ彼らをうらやましく思うばかりであった。われわれ文明人は月が本当に与える影響力との接触を失ってしまっている。それはわれわれには自意識的な感情と、ささやき声とちょっとした欲望と別れの感傷的な歌を意味しただけだった。せいぜい大脳でかきたてられた興奮でしかない。それは肉体的な爆発、この思考を超えた歓喜への潮を意味し得なかった。(212)

つまり西欧の精神活動は主に思考と合理性に基づいてきたが、その思考と合理性が生き生きとした人間の生命を抑圧し、完全な自己の解放を阻害してしまったということであろう。グリーンは旅の終わりに次のように書いている。

それは人間性に対するある種の希望を呼び覚ました。この赤裸々さと単純さと本能的な人懐っこさに、思考よりも感情に立ち戻り、そしてもう一度やり直すことができたなら……。 (223)

この旅を通して、グリーンは思考と合理性よりも感情と感性を優先させるという考えを再認識したことになる。これはグリーンの宗教観にも影響を与えたはずである。理性よりも感情を優位におく考え方が再認識された時、「カトリックに対する知的理解」の限界と、情緒的な理解の重要性、つまり「ビリーフ」よりも「フェイス」の優位が確認されたと考えられる。

またグリーンはこの旅を通して、ヨーロッパでは到底理解できなかったような、カトリックの持つ普遍的性格も理解している。グリーンはボラフンという村の近くにある聖十字架教会 (“the Order of the Holy Cross”) というカトリックの伝道所に立ち寄るが、その伝道所で信仰生活を続けている神父と尼僧の姿は大いにグリーンを感激させ、グリーンをして「白人と黒人の比較で、初めて恥ずかしく思わないですんだ。汚職と奴隷制が語り草になっている共和国のこの片隅に、少なくとも商業主義的でない何かがあった」(86)と言わしめている。興味深いことにグリーンはサマセット・モームの短編「雨」の中の、暗い情念に燃えて住民を無理や

り改宗させる宣教師デイヴィッドソンが一般にそのような狂信的で独善的な宣教師像を定着させたと言っている。しかしボラフンの伝道所の神父と尼僧は、「雨」のデイヴィッドソンとは反対に住民に匹敵する優しさと正直さを保持し、住民を無理やり改宗させる事はなかった。そしてグリーンは次のように書いている。

宣教師に関して、非常に多くのナンセンスなことが書かれてきた。彼らが帝国主義者や商業的搾取者の手先として書かれなかった時は、彼らは単純で幸せな異教の人々をヨーロッパの宗教に改宗させ、ヨーロッパ的な抑圧で彼らを虐げようとする性的に異常なタイプとして見なされて来た。キリスト教は西欧の異教の民が極めてうまく改宗させられた東洋の宗教であることが忘れられているようである。宣教師たちは論理の点ですら信用されていない。というのはもし人がキリスト教を信じるなら、人はその普遍的な正当性を信じなければならない。キリスト教徒はヨーロッパのために一つの神を、アフリカのためにもう一つの神を信じるわけにはいかない。ユダヤの宗教の重要性は、東洋のために一つの神を、西洋のためにもう一つの神を認めなかったことであった。(87-8)

グリーンはここで、今まで宣教師たちは帝国主義や商業的搾取者かもしくは、単純で幸せな異教徒に無理やりヨーロッパの宗教に改宗させ、彼らをヨーロッパ的な抑圧でもって虐げてきたと言ってきたと言う。その事実に対しグリーンは「キリスト教は東洋の宗教で、それに西洋の異教徒がうまく改宗させられたという事実が忘れ去られているようだ」という論理を展開する。これは、自分たちがうまく改宗させられてきた事実を忘れて熱心に改宗させている宣教師を批判する人に対する批判である。グリーンは続いて「宣教師たちは論理の点で信用されていない」とも書いている。これは宣教師たちの行動に対する批判ではなく、彼らの思考パターンに対する批判である。グリーンは宣教師が地元の神を認めてこなかったと批判されてきたと言いたいのである。これに対しグリーンは「キリスト教を信じるならば、人はその普遍的妥当性を信じなければならない。キリスト教徒でありながらヨーロッパに一つの神をそしてアフリカにも一つの神を信じるわけに行かない。ユダヤ人宗教の重要性は東洋に一つの神を西洋にもう一つの神を認めなかった点だ」と言い、宣教師の行為を正当化している。グリーンはここでキリスト教の普遍性という概念を持ち出している。アフリカの奥地で、他の白人と違って墮落することなく、また住民に無理強いすることもなく活動している宣教師の姿は、グリーンに初めてヨーロッパ的文脈を離れることによりキリスト教の普遍性に気付かせたと言えるであろう。

さらにキリスト教の持つ普遍性は、グリーンで、キリスト教と土着の呪術的な宗教を対比することにより、より強く意識されている。グリーンは、呪術的な性格を持つ「悪魔」の仮面をつけた村人の踊りを3度、また仮面の収集を1度目撃している。グリーンは初めはキリ

スト教と現地の呪術的宗教とどちらがより優れているのかという判断を保留する。またジギタという村で、その圧倒的に神秘的な「悪魔」の影響を受け体調不調を引き起こし、それは帰国するまで続く。そして稲妻を起こすことのできる人間の話を危うく信じかけてしまう。つまりグリーンは呪術的宗教や超自然力の影響も認めるのである。しかし仮面が村によってかなり異なっているという事実——ある村では仮面は動物に近くなり別の村では人間に近くなる——はキリスト教の普遍性と最も異なることである。反対にキリスト教の普遍性の一つがリベリア奥地でラテン語で称えられる公教要理である。グリーンはこれに感動し、「ラテン語で称えられる祈祷の声は、イギリス領の港のトタン小屋よりも、シエラレオーネで私が見たどんなものよりも優れた文明を表していた」(86)と書いている。キリスト教対呪術宗教という構図もまたグリーンにキリスト教の普遍性を意識させたと考えられる。

同時にグリーンはリベリアにおける宣教師に対して「アメリカの修道僧やイギリスの尼僧をボラファンに定住せしめたものは宗教上の信仰(“faith in their religion”)以外の何ものでもない」(88)と断言している。グリーンはここでは“faith”という語を使っている。つまりリベリア奥地で、他の白人とは違って墮落することなくしっかり布教に勤めている宣教師の姿を見て彼らの姿に感動を覚える時、信仰の持つ力の肯定的な側面を強く意識したはずである。そして自分のひ弱な信仰心を見直し、信じることへの抵抗が弱まったということが十分考えられる。

決定的な出来事は、グリーンがこの旅を通して一種の改宗を経験したことである。グリーンはジギスタウンという村で熱病に罹り、旅行に同行した従妹のヴィヴィアンはグリーン之死を覚悟したことがあった。幸いにも熱は下がってグリーンは生き抜いたが、この時グリーンは「生への激しい関心」(“a passionate interest in living,” 251)を自分に見出した。グリーンはこの時の発見に関して次のように述べている。

その夜重要な発見をしたように思えた。それは改宗に似ており、私は以前に改宗を経験したことがなかった。(私はある宗教的信仰に改宗したことはない。私はその教義の蓋然性における独自の議論に納得しただけだった。)もしその経験がそれほど私にとって新鮮でなかったなら、それほど重要に思えなかっただろうし、改宗が長続きしないことも知ることになったであろう。たとえそれが長続きするにしても、脳の底にたまる少しばかりの沈殿物としてでしかない。たぶん沈殿物でも価値はあり、この時の改宗の記憶は緊急事態において何らかの力を持つだろう。かつてジギスタウンで、生きるという単なる行為が持つ美しさと望ましさを私が完全に納得したと、知的に考えることで自分を奮い立たせることができるかも知れない。(251-2)

この部分で問題となるのは、「生への激しい関心」は改宗に似ていたこと、以前のカトリック

への改宗は改宗とは言えないものであったこと、そしてその「生への激しい関心」の発見を頭で考えただけでも人生の支えになるものだという点であろう。このグリーンの言い方は慎重で、この時の発見が改宗だったとは言っていない。しかしその時の発見が、以前のカトリックへの改宗を「改宗ではなかった」とグリーンをして言わしめるほど「新鮮」で、「生への激しい関心」と「生きるという単なる行為が持つ美しさと望ましさ」の発見を冷静に頭で考えただけでも、これからの人生の支えになるという言い方をしている。つまりグリーンにとってはこの時の経験が十分長続きするものであり、「脳の底にたまる少しばかりの沈殿物」以上のものであったと判断できる。では「生への激しい関心」と「生きるという単なる行為が持つ美しさと望ましさ」の発見がグリーンにどのような影響を与えたのであろうか。グリーンはもともと死への願望が強く、青年時代にロンアン・ルーレットを試みるなど何度か自殺未遂を引き起こし¹⁷⁾、『地図のない旅』の中でも「私はこれまで当然のこことして死が望ましいと思ってきた」(251)と書いているが、いわば死への願望から生への願望への転換である。言い換えれば、この生への願望は、危機を生き抜いたという自信と言って良いであろう。グリーンはヨーロッパで宗教を信じることにより自分自身を失うことを恐れていた。その恐れのためにカトリックの理解も知的な段階にとどまっていた。しかしヨーロッパから遠く離れたリベリアの奥地で経験した恐怖は、それまでヨーロッパで感じていた自己を失う恐怖とは比較にならないほど根源的で現実的であった。それを経ることにより得た、生きることへの自信は、ヨーロッパで感じていた「信じることへの恐れ」など、実にちっぽけで観念的なものに過ぎないことをグリーンに認識させたはずである。言い換えると、生きる自信が信仰に伴って自分を失う「恐れ」を凌駕し、グリーン信仰の知的側面を和らげる一因を担ったのではないかと考えられる。

グリーンはこの旅の総括として、「それは人間性に対するある種の希望を呼び覚ました」(223)と言い、さらに次のように述べている。

私は何もアフリカに留まりたいというのではない。私には、そこに発見できるとしても、節度のない官能を求める気持ちはない。しかし始まりと、落ち着きだけでなく恐怖と、やさしさだけでなく力をよく理解したとき、われわれがなしてきたことに対する憐れみがいっそう痛切に感じられた。(297)

グリーンはリベリアで自分と人類の子供時代を追体験し、それによりキリスト教の普遍性の認識を得、さらに死への願望から「生への激しい関心」という一種の改宗を経験した。そしてこの引用の中で、「アフリカに留まるつもりはない」と言っている点と、人類の歴史に対して「憐れみ」という感情がグリーンの中に沸き起こってきたことに注目すべきである。まず純粋で「無垢さ」を保持するがゆえに、アフリカは現代のヨーロッパにとってのパラダイムとはな

りえても、「アフリカに留まるつもりはない」という意思表示は、たとえどれだけみずばらしくても文明世界に再び立ち戻らざるを得ないグリーンの実在を意味する。グリーンにとってリベリアは自分のそして人類にとっての子供時代を表すが、この認識は同時に現代のヨーロッパは子供時代の「無垢さ」を犠牲にして成長してきた大人の姿を表すことになる。「無垢さ」は成長とともに失われるものであり、つまり原始に対して文明は、呪術的宗教に対してキリスト教は歴史の必然的結果である。だからと言ってグリーンはリベリアとヨーロッパの現在と未来を忌み嫌ったり、あるいは死を望むというニヒリズムに陥るわけではない。「憐れみ」という感情は、グリーンにとって現在の自分と人間に対する拒絶ではなく受容を可能にする感情である。グリーンは、リベリアでの最後の地、モンロヴィアに着いた時、「フリータウンは海岸に沿って、朽ちるまでほっておかれた商港のようだ。それは腐敗の光景である。しかしモンロヴィアは始まりのようである」(272)と書き、モンロヴィアには新鮮さを感じている。またあらかじめ結果が分かっている、公正とは言えない大統領選挙を目撃するが、グリーンは、リベリアの「みずばらしさ」を「それはより初めに近い。モンロヴィアのように、それは間違った始まりをしたが、とにかく始まったばかりである」(296-7)と書き、その行く末を知りつつ、リベリアを軽蔑することなく「憐れみ」の情を持って眺めている。この点は、自分に対しては「死」を望み、ヨーロッパに対しては「不信」しか抱かなかった旅の初めとは大きく異なる点である。山形はこの「憐れみ」の情を「自己の存在を含めたすべての存在に対するグリーンの新たなる愛の表白」¹⁸⁾だと述べている。このようなグリーンにおける「愛」の芽生えは、グリーンにとって「個人的な存在」という自己の問題を突き抜け、全存在に対する「愛」という視点を新たに得たことを意味する。そして「愛」という感情こそ、行き詰ったヨーロッパ文明に可能性を切り開く感情であることにグリーンは気付いたはずである。このことはグリーンのカトリック理解においても、知的理解より情緒的理解の重要性を彼に認識させる結果をもたらしたことは想像に難くない。

V

命がけのリベリア旅行を通してグリーンが経験した、失われた自己とヨーロッパ人の子供時代の追体験の結果、グリーンはリベリアを子供時代、現在のヨーロッパを大人の世界と認識することで「現在だけでなく、人が出て来たる過去に基づいて、時間における自己の位置」(7)を確認した。またわれわれが「どこで道を踏み外したのか」という点に関しても、子供時代に保持していた「無垢さ」を喪失したためであるということを理解し、「思想・知性」に基づいて築かれた文明を「情緒・感情」で捕らえなおす必要性を認識したと言えるであろう。つまりグリーンはこの旅行の目的を一応は果たしたことになる。この事実は彼のカトリック理解にも変

化をもたらしたと考えられる。もともとグリーンのカトリック理解は知性に基づく「ビリーフ」と言って良いものであり、その背後には「信じることへの恐れ」があった。しかし「生への激しい関心」の発見、「カトリックの普遍性」に対する認識、さらに「憐れみ」という感情の芽生えは、グリーンにその「恐れ」を乗り越えさせ、知的なカトリック理解から情緒的なカトリック受容への変貌をグリーンに迫るものであったと言える。つまりグリーンのカトリック観において「ビリーフ」の側面に新たに「フェイス」の側面が加わったと言えるであろう。そういう理由でグリーンのリベリア旅行はグリーンにとっては「第2の改宗」と呼べるような可能性を持っていたと考えられる。

注

- 1) この論文は、2003年12月13日に、日本比較文化学会関西支部研究会で発表したものに、加筆修正を加えたものである。
- 2) Graham Greene, *A Sort of Life in Fragments of Autobiography* (London: Penguin Books, 1991), p. 118.
- 3) *Ibid.*, p. 118.
- 4) Norman Sherry, *The Life of Graham Greene: Volume One 1904-1939* (London: Penguin Books, 1989), p. 255.
- 5) *Ibid.*, pp. 188-9.
- 6) *A Sort of Life*, p. 120.
- 7) Graham Greene, *Journey Without Maps* (London: Heinemann & Bodley Head, 1978), p. 3. 以降この作品の引用はこの版により、該当ページ数のみを記載する。
- 8) グレアム・グリーン、マリ＝フランソワーズ・アラン『グレアム・グリーン語る』三輪秀彦訳（東京、早川書房、1983）、pp. 266-7。
- 9) *A Sort of Life*, p. 122.
- 10) *Ibid.*, p. 120.
- 11) *Ibid.*, p. 122.
- 12) Graham Greene, *Ways of Escape in Fragments of Autobiography* (London: Penguin Books, 1991), p. 193.
- 13) Quoted in Jeffrey Meyers, "Greene's Travel Books," in *Graham Greene: A Reevaluation* edited by Jeffrey Meyers (New York: St. Martin's Press, 1990), p. 51.
- 14) 『イギリス祭事・民俗辞典』（東京、大修館、1992）、May Day の項参照。
- 15) Georg M. A. Gaston, *The Pursuit of Salvation: A Critical Guide to the Novels of Graham Greene* (Troy, New York: The Whitston Publishing Company, 1984), pp. 76-7.
- 16) Daphna Erdinast-Vulcan, *Graham Greene's Childless Fathers* (New York: St. Martin's Press, 1988), p.

69.

17) Sherry, pp. 85-91.

18) 山形和美『グレアム・グリーンの文学世界——異国からの旅人——』（東京、研究社、1993）、p. 69。

(タマイ・ヒサシ 外国語学部助教授)